

## 母子関係の形成—家族による発達の側面—

伊藤 榮子<sup>1)</sup>

### Development of Mother-Child Relation: On Developmental Phases by Family

Eiko ITOU

#### 要旨

本研究は、幼少期から学童中期までの学習経験が、その後の成長にもたらす影響を知るため、家庭・学校・社会の生活区分の調査項目、現在の人格的特性の自己評価項目を135人の看護短大生を対象に調査した。結果の分析は「はい」70%以上の集団と「いいえ」50%以上の集団に分けて行った。両集団に統計学的に有意差が認められたのは家庭生活であり、学校・社会生活には両集団に鮮明な差はなかった。その結果、以下のことが明確になった。1. 「はい」の集団の家族は、家庭内の規則遵守・習慣形成などで厳しい。忍耐や知的抑制、自己抑制への関心が高い。社会的な伝達機能の育成・知的能力への関心も高く、希望と上昇志向も同様である。2. 「いいえ」の集団は「物事の判断は直感に頼る方」であり、感情表出もしないで抑えてしまう可能性がある。この集団の家族は「応答性の質」と「発達の臨界期」を無視する可能性がある。

キーワード：幼少期、学童中期、臨界期、家族機能、家族の応答性

#### Summary

This study investigated how learning experiences during the period from birth to the middle stage of childhood (8 to 12) influence on character formation later. The subjects, 135 nursing junior college students, were asked to answer a questionnaire containing categorized items of home life, school life, sociability, and self-estimation of their own present characteristics. The group of over 70% who answered in the affirmative ('yes' group) and over 50% who answered in the negative ('no' group) were significantly (statistically) different in their home life, but not in their school/social living. The results showed the following facts.

1. The 'yes' group families were looked upon as rather strict with keeping promise/being faithful to the family, and had taken more interest than the 'no' group, in their children's habit formation. They were more controlling of their children's academic events, fostering better social functions of communication skills, while at the same time hoping for them to have dreams or ambition, as well.
2. Subjects of the 'no' group formed judgment through intuition rather than on the basis of facts, and tended to restrain their emotional expression, and also their families were apt to neglect the 'quality of responsiveness' and the 'critical period of development.'

Key words : infancy and childhood, middle stage of school-age, critical period, family function and responsiveness

---

1) 母性看護学教授 (母子関係論)

## 序

人の発達には段階があり、その各段階における特徴的なまとまりをもった心理的システムがあると考え「発達の段階理論」(stage theory of development)がある。あるまとまりのある段階と次の段階との間に心理的システムに質的な違いを認め、前の段階から次の段階への移行は必然的なものとして直線型の段階(stages)の流れがあると想定する。

E. H. エリクソンは、人には「心理社会的な発達段階が想定することができ、そして、その段階の区切り目(想定できる境界線上)ではクリアすべき課題が存在する」という点が特徴的である。その形で想定される発達段階に彼自身が考えた図式(epigenetic chart後成説的発達段階図)がある。

本論では、試みに基本的意味を変えずに、加齢順に心理・社会的な発達と課題を合わせて右肩上がりの構成の表1「心理・社会的発達段階と課題」を作成した。

エリクソンは、人は生涯を全うするまでを8つの心理社会的発達の段階を想定した。各発達段階は個人的・文化的要求を伴う技能との統合が必要な場面があり、その場面で固有な問題に直面する。心理・社会的発達の段階は、単に年齢的な結果としてあるのではなく、心理的な事柄が生起しなければ、次の段階に円滑に移行して行かないと考えられている。

この表は人の「生涯発達」の1つの標準的な素型と見ることができ、この素型に照らして、人格をどのような内容で構成し、どう発達させれば「より良く生き残るのか」という発達上のスケジュールが見える。この「発達課題」の理論<sup>1)</sup>は、次の5つの体系的概念に基づいている。①発達の各段階は連続し、後に続く発達段階と成長パターンに従った段階の進行の概略は予測できる。②人が成長する際に社会的動物として発達する。その時の課題は、一連の技能と能力から成り、個体が環境に対して支配力を増すにごとに獲得していく。③心理社会的危機は発達の各段階において社会的環境の要請に適応しようとする心理的に努力する時、通常ストレス(緊張)が起き、通常と異なる危機と呼ぶ。④心理社会的危機を解決するための過程(コーピング行動)は、危機を巧みに克服する努力であり、克服できない場合の社会的圧力との間の葛藤を反映する。

## I. 発達課題の階層

こうした発達課題をクリアーする際の精神状態のコーピング(扱い方・問題処理の努力)には、周囲の大人・家族や、その他の人からの人生経験(物語などの間接経験も含む)を学ぶことが、人生の解釈の方向性と基本的な心理的「構え」の形成に役立つ。次に、発達課題の階層における概念に関連する胎児期から学童中期までを概括する。

### 1. 胎児期(受精～誕生)における母親の課題

この時期は子どもよりも母親の課題が主である。母親の容姿も妻・夫の関係をも変える。妊娠中の妻に強い関心を持つ夫もいるし、戸惑い、次第に関心を失い感情が揺れ動く未成熟な夫もいる。大抵の場合は、夫婦や子どもについての希望や将来計画、障害をもつ子どもが生まれるかもしれない不安、出産時の諸準備がある。子どもを持つ決断の次には、親となるための能力が次々に要求される。そして育児は生活では最優先される。育児に関して性差のゆえに避けて通れない役割分担と、その役割が継続・終了するのは何時か、その頃に母親は社会復帰の能力をまだ持続しているか、経済状況(Q. L.)は維持可能か、こうした不安を乗り越えるほどの価値があるのかという不安、欲求阻止が起こると言われている。

母親は胎児が遺伝・発生の原理に従い9ヶ月の発達過程で、身体器官が分化し、母親自身もその変化を経験する。従来の父親は心の中で子どもが社会に役立つ健康で明るく活発で有能・正義感・公正さを身につけて育つようにねがう。

この段階の女性は、この種の心の不安を克服し、催奇性を回避する(異常児出産を回避する)、安全性(母親の催奇性回避の知識・習慣)などの責任も要求される。

### 2. 乳児期(誕生～2歳)の発達課題

#### (1) 社会的愛着

この時期には、感覚運動的知能と原始的因果関係(本能的に周囲の対象物の固有な性質を考慮し環境を探索すること)、対象の永続性(環境内の対象が永続的に存在し視界から消えてもなくなってしまったとは考えないこと)、感覚運動的機能の成熟(言語は殆ど介在しない感覚的運動により展開される運動習慣形成による知能が形成され、運動感覚パターンを拡大させ、自分の世界を理解したり扱ったりすること)が特徴的である。

社会的愛着は、乳児に母親との間に肯定的な情緒関係（例えば離れがたい思い）を形成することである。初期の愛着は父親と母親の間に確立される。更に乳児の養育活動を担う者、乳児に暖かい愛情を注いでくれる者に対しても愛着は形成される。その時、乳児は愛着の対象と接触し続けようとし、その対象がいなくなると悲しいそぶりを示し、愛着対象と共にいるとリラックスし安心する。他の人と一緒のときは気難しくなる。<sup>2)</sup>

愛着形成段階には次の種類の行動がある。吸う、捜し求める、つかむ、微笑む、じっと見つめる、抱きつく、目を追う、という行動で養育者と親密性を保とうとする（誕生～3ヵ月までの行動）。見知らぬ人よりも、よく知っている人に対してより多く反応する（3ヵ月～6ヵ月の行動）。愛着対象（人）と物理的な近接と接触を求める（7ヵ月～歩行期）。因みに歩行期からは、親密さへの欲求を満たそうと愛着対象とその他の人に及ぼすような様々な行動をする。

この時期の愛着の内容は、一般的には安定した愛着、不安—回避愛着、不安—抵抗の3つの愛着の形が確認されている。例えば安定した愛着が確立していると短期間、母親が離れていても母親が戻れば子の嘆きは減少し、環境の探求に戻る。「不安—回避の愛着」を示す子どもは、分離後には母親との接触を避け母親の努力を無視する。こうした子どもは他の子どもよりも一人でいる時に嘆くことが少ない。「不安—抵抗の愛着」を示す子どもは分離の後で母親に怒りを向けるが、慰められることに抵抗する。これは「感情がねじれた状況」と言えるかもしれない。

12～18ヵ月の間に、「乳児—母親の愛着」の内容はかなり安定しているように見える。乳児の安定した愛着は、3～5歳間の積極的に適応する能力と結びついている。「安定した愛着」を示す子どもは、やがて大きな回復力、セルフコントロール、好奇心をもった子どもになると言われている（下線は筆者）。<sup>3)</sup>

## （2）情動の発達

乳児期の情動は乳児と養育者のコミュニケーションを中心に起こる。用心深さ—恐れ嘆き（例、泣く）、関心（例、警戒して凝視する）、興奮（目覚めて活動している）、「快感—喜び」、「激怒—怒り」など乳児自身や状況、生活の予

測不可能なことについて変化する乳児の意識を特徴付ける。これらは身体的な不快、覚醒、痛み、中枢神経の緊張などであり、情動の主たる源となっている。12ヵ月の頃には「喜び→意気揚々」に、「不安→直接的な恐れ」に、「怒り→すねる」に、「警戒→恥や反抗」に変わる。18ヵ月の頃には「快→感情の肯定的価値」に、「警戒・恐れ→恥」に、「怒り→反抗」に変化していく。

## （3）臨界期

臨界期と言う概念は、ある技能や行動型が発達するための最も効果的な時期、またはそれらの発達を可能にするレディネスがあることを言う。技能や行動は、臨界期の開始以前には出現しそうでないし、臨界期を過ぎると全く可能ではないが極めて確立し難くなる。臨界期をもつ行動がうまく出現するか否かは生体の生物学的レディネスと環境的なサポートが整っているかどうかによる。コンラート・ローレンツの「インプリンティング」理論によると「臨界期」は一定期間であり、その期間が乳幼児期の脳の発達の仕組みが大きく関わっている。「三歳児神話」もこの時期前後のことである（注1参照）。

## 3. 歩行期（2～4歳）の発達課題

この時期の子どもは移動能力が完成し、空想とそれによる遊びの発明、言語発達による伝達速度が増して確実になる。周囲のあらゆる状況の中に模倣可能なものを見つけて模倣し学習する。乳児期と比べて、生きていることが楽しくて仕方がないように見える劇的な変化が起こる。しかし、この段階で大切なことは自己抑制（セルフ・コントロール）という発達課題である。これがクリアー（獲得）されないと、忍耐力や努力の基礎となる要素なので、その後の人生に大きな支障を招くことが起こりかねない。自己抑制は、「要求に対応する能力」、「状況に応じて行動を変容させる能力」、「他人に言われなくとも社会に受容される行動をする能力」等と定義される。自己抑制には、怒りの感情のコントロールと環境のコントロールがある。

### （1）怒りの感情のコントロール

この時期の子どもは課題達成の能力不足や親による行動の束縛などで怒りの感情を生み出す。怒りの感情の抑制には親がモデルになって衝動の満足を遅らせて耐えるなどの能力を身につける。親の怒りの表出も抑制から子どもには学ぶ

ことが多い。以前よりも欲求不満が少なくなるが、欲求不満を上手に操る方法を身につけていく。これは未来についてある程度まで認識する原始的な時間感覚を身につけ始めるからである。欲しい物はいずれ入手できると気付き始めるので情緒的動揺が少ない。そのような怒りの制御を学ぶモデルは両親に大きく依存している。両親がこの時期の子どもの欲求阻止に対してひどく罰し嘲笑すれば、怒りの表出のモデルとして捉える。怒りを操作してその強さを減少させる方法には、怒りの攻撃の初めの状況についての冷静な説明や、怒りの犠牲となった者の気持を愛情をもって説明すること等がある。

#### (2) 環境のコントロール

子どもは就寝時間、着る物、好きな食物、家族の活動決定等に参加し、自分もやってみようと思い、自分のほうが上手にできると思う。新しく複雑なこともやってみるとうまくいき、自分の能力に自信を得て自律心獲得へと向かう。しかし、能力を超える課題は大人と一緒にやって(手伝って)遂行しないと、しばしば失敗を招いて恥をかい、そのことに伴う大人の嘲笑は自分への愛情や能力・自信への疑惑となる。

### 4. 学童前期(5～7歳)の発達課題

#### (1) 性の同一視・役割、両親との同一視、具体的操作などの発達

この時期の子どもにとって学校、仲間集団、近隣、TVなど全てが自己概念の形成に影響する。行動を適合させ、従うべき家庭外の影響に気付く。自分の家族や自分の考えや生活様式は絶対的なものではなく、それまで馴染んだ考え方も疑問視する。また、生命や存在に広い好奇心を持つのが特徴的である。それは性の同一視(同性仲間・同性の着衣・同性の職業・振舞い方等の意識の獲得)、性役割基準(伝統的には男性は力・大きさ・短髪・力瘤・無骨さ等。女性は繊細さ・美しさ・優しさ・長髪・曲線の等の基準的特徴の社会化と方向付け)、両親との同一視(親のような価値観・誠実さ・信念の受け入れ、忠誠を示し近づきたいという感覚を持つこと)、性役割の好み(自分は男/女であることが好きだから男/女の子がいい)が確立する。

具体的操作ができるようになる。具体的操作は、思考能力で、保存(量、重さ、数など形が変わっても量が一定であるなど)、分類能力、

結合能力(数の加・減・乗・除)等であり、それが発達する。更に初期の道徳的発達(家族や地域社会の罰や報酬を伴う道徳的基準の学習)がある。これには、自分や家族への罰則・悪影響、社会的契約、普遍的な倫理原則に基づく判断も加えられ、良心と罪悪感を形成していく。両親の温かさ、民主的な意思決定、誘惑に対する抵抗のモデル(両親)の存在は、子どもが社会を身内と考える(親社会的な)行動や社会的責任感を高めていくことに大きく役立つ。

### 5. 学童中期(8～12歳)の発達課題

この時期の子どもは、仲間集団との関わりから多様な見方や考え方を学び、妥協と友情(例、親友)関係と友情に対する欲求充足、仲間内の社会的規範(約束・チームプレイ等)、仲間との親密な経験から得る仲間からの承認(受容)等を学ぶ。運動能力や知的能力、芸術的才能の評価は親や教師だけが評価するものではなくなる。こうして子どもの能力の評価は外的評価(成績・教師の意見・親の承認・仲間の承認)により確認される。自己有能感は課題達成感であり成功経験により高められる。これには自分と同程度の人が課題を達成すると自分も達成したという「代理経験」をもする。

この時期の最も印象的なものは知的・芸術的・運動能力の成長である。具体的に知覚したことや、目で見えない・音で聞かない「心の中にある概念」の原則に従って注意し、科学・歴史・数学的領域における類化や因果律の原理を学習し理解が可能となる。この際に最も重要な道具は読書能力である、自律的に探索する可能性が一層拡大するが、この時期の子どもは繰り返しや混乱、当惑する学童前期の段階を乗り越えようとする途中にある。

この時期の子どもに重要な課題は勤勉性を学ぶことである。その理由は次である。この期間の教育は、個人の勤勉さの感覚の発達に影響を与え、教育課程では子どもは次第に難しい問題に直面し、新しく発達した技能で対処する多くの機会に出会う。その中で子どもは、「勤勉は価値」であり、能力獲得の有効なプロセスであることを学ばなければならない。問題解決学習の成否にかかわらず、子どもは自分の問題解決能力が常に評価される。課題が達成されない場面では「恥」を学び、劣等感を得ることにつながる。この時期には他の何よりも先ず勤勉さを学ぶ必要がある。勤勉の概念の中には能力を築き上げて、有意味な仕事を遂行す

るという熱意が含まれる。

心理社会的理論では、個人の仕事に対する基本的態度は学童中期において確立されると指摘されている。<sup>4)</sup> そのため、現実設定された目標に立ち向かい、最終的には成功するように努力ができるように励ます必要がある。

## II. 発達課題に関する調査（自己評価）

本節では、前節の内容に沿って調査をし、学童中期（8～12歳）の中間にある10歳ごろに焦点を合わせた（注2参照）。その頃までに形成された人格形成の基礎部分についての自己確立と、現在の人格的特性に対する自己評価（項目）についての調査を行う。

### （1）目的

現在、20歳前後にある人間（学生）の幼少期から学童中期（8～10歳）までの学習経験（日常生活全般的）が、子どもの成長にもたらした影響と、あわせて学生が行う現在の自分の人格的特性の自己評価を見たい。調査の視点をこの時期にあてた理由は、発達過程の学童中期（小学校3年～9年生〈中3〉）では、仲間の反社会的な行動に同調する傾向が増加するからである。例えば、仲間を騙したり盗みをする等の迷惑行為に同調する傾向が多くなるという報告がされている。<sup>5)</sup> このことから10歳（小学校4年生）頃までは、童話の世界に見るような純粋で基礎的な人格的特性の構築は、まだ息づいていると考えられるからである。初期の道德性の発達には学童前期に家族や地域社会の道德的規準を学習し、それを内在化した規準として行動を方向付けることで起こる。道德的行動は既習の事柄から引き出した状況・要因・価値観・目標によって影響を受け、規範を破る行為への誘惑などに抵抗する役割を果たす。家族機能の中の信念がそれを強化すれば道德的行為も強化される。

### （2）方法

- i) 調査方法 質問紙によるアンケート調査（表2を参照）。

調査は、前述の学童中期の発達観を下地にして家族観（付随して児童観）に焦点を合わせ、調査項目はできるだけ家族観を具体化した形で作成した。それらは家族との関わりの中で形成される発達内容が、やがて学校生活、近隣の社会生活、現在の人格的特性に発展・拡大していくという考え方

に基づいた。本調査は対象の了解を得る等の倫理的配慮をして（注3）行った。調査項目には言葉遣いへの家庭の配慮・日常生活の基礎的技能と・自分の将来の見通し・勤勉性と努力などの習慣形成の度合い・対人関係への積極性・家族の一員としての協力、自己責任で仕事に向かう姿勢などがある。

- ii) 調査対象 看護学生（19～22歳、135人：注4）。有効回答数122人（90.4%）

- iii) 調査期間 2004年8月31日・9月10日

調査方法について依拠した家族観には、社会集団に容認された一般性をもつ価値観がある程度体系化されものと、個人的な経験に基づいた個人水準で形成された価値観（後述）がある。後者は、子どもに対する個人の考え方（特に家族観）が反映される。

## III. 結果・分析

アンケート調査（表2）では調査対象は以下のことに回答した。回答者は、I. 家庭生活の項目（表2. 1～19）、II. 学校生活の項目（同20～30）、III. 社会生活の項目（同31～38）は、◎「はい」、△「いいえ」、○「どちらとも言えない」で回答し、IV. 現在の人格的特性の項目については、その特性を下位区分した20項目から任意に7項目を選択した。IV. 現在の人格的特性の項目は（a）1～8を「どちらかといえば好ましい」項目、（b）9～15を「どちらかといえば普通」の項目、（c）16～20を「どちらかといえば好ましくない」項目に分けた。分析の結果は、考察の際に見やすくするために表2に集約した。

調査結果の分析では、調査I～IIIの全ての「どちらとも言えない」項目（○印の回答）と、現在の人格特性の調査（b）「どちらかといえば普通」の項目は、それぞれ、将来において「はい」か「いいえ」に変わるという、2つの可能性を持っている。このことから、分析ではこの中間に位置する回答項目は除き、「はい」と「いいえ」（◎と△の集団）の項目を検討対象とする。

現在の「IV. 人格的特性」では、「（a）どちらかといえば好ましい」項目、「（b）どちらかといえば普通」の項目、「（c）どちらかといえば好ましくない」項目を対象にして検討する。

### （1）両集団の全体的な傾向

上記の理由による区分（家庭生活・学校生

活・社会生活)別の比較検討では、「(はい)が70%以上の集団」と「(いいえ)が50%以上の集団」の対照の差を鮮明にするために、区分毎に「はい75%以上の集団」と「(いいえ)50%以上の集団」の%の平均差が10ポイント前後、又はそれ以上の区分ごとに有意差を求めた。両集団の差(t検定による差異)が最も顕著なのは家庭生活であった( $p < 1.06, 1.86$ )。家庭生活は、学校生活、社会生活に比較して鮮明な対照を示した後2者の「はい・いいえの両集団」間に鮮明な違いはないといえる。

- (i) 家庭生活の項目では、「はい集団」は否定的回答「いいえ」の平均値が約24%であるのに、「いいえ集団」の「いいえ」の平均値は、逆に2倍以上(55.3%)である。
  - (ii) 現在の自分の人格的特性では「どちらかといえば好ましい」の回答者はおよそ全調査対象の43%、「どちらかといえば普通」を回答した者はおよそ36%、「どちらかといえば好ましくない」は21%であった。前回の親を調査対象にしたときの「どちらかといえば普通」比率は32%(平均値)であった。<sup>6)</sup>子どもに対する親が評価の方が、学生が自己評価よりも厳しかったと言える(以下「はい/いいえ」の形で%は省略)。
- (2) 両集団の区分(家庭生活・学校生活・社会生活)内の項目毎の違い

- (i) 家庭の規則遵守・習慣形成の項目
  - (ア)「朝食は一緒に」(82.6/50)
  - (イ)「家のお手伝い」(75.9/0)
  - (ウ)「TV・ラジオで夜更ししない」(62.1/18.8)
- (ii) 忍耐・知的な抑制の項目(社会の規則の遵守。自己抑制の基礎的な態度)
  - (ア)「欲しいものは我慢させられた」(93.1/81.3)
  - (イ)「欲しいものは手に入れるまでは頑張らない」(69.0/31.3)
  - (ウ)「言葉遣い注意をされた」(69.0/31.3)
  - (エ)「く宿題/勉強をしなさい」の注意は素直にきいた」(69.0/43.8)
- (iii) 学校生活の項目(希望と上昇志向)
  - (ア)「将来の夢に向けて努力をしようとした」(55.2/25.0)
  - (イ)「先生の話はよく聞いた」(82.2/43.8)
- (iv) 社会生活の項目(交友関係の広がり・受け

#### いれの積極的な態度)

- (ア)「自分の家に友達がよく遊びに来た」(82.2/56.3)
- (イ)「洋服や靴はブランド品を欲しがらなかった」(79.3/68.8)
- (v) 現在の人格的特性
  - \* (a.「どちらかといえば好ましい」項目)
    - (ア)「自分の義務も果たし自己主張もする」(20.7/31.3)
    - (イ)「臨機応変に対応できる」(51.7/43.8)
    - (ウ)「他人を思いやる優しい気持ちがある」(65.5/50.0)
  - \* (b.「どちらかといえば普通」の項目)
    - (ア)「料理、洗濯、掃除等進んで行う」(48.3/25.0)
    - (イ)「物事の判断は直感に頼る方」(26.7/50.0)
    - (ウ)「感情は抑制してしまう」(20.7/43.8)
  - \* (c.「どちらかといえば好ましくない」項目)
    - (ア)「欲しいものはどうしても手に入れたと思う」(3.4/12.5)
    - (イ)「無意識に他人を厳しく批判する場合がある」(13.7/6.3)

#### IV. 考察

本論の分析の結果を考察する時、依拠する観点には前述の家族観である。その前に子どもの発達段階・課題以外の観点を示したい。人間の本性は基本的には良いものであり、子どもの中に本来存在するその良さは、そのままでは実現することはない。少数の例外を除いて、大多数の子どもの道徳的資質と知能的資質は同じように生まれついている。子どもは幼い時から周囲の影響を受けて自律的に学習する能動的な生活体であり、初期経験から影響を受けやすい。健康と発達には、養育者の応答性が決定的な役割を果たす。子どもの行動・能力の変化の時期を捉えて行動を社会的に望ましい方向に導いていく事が大切である。ただし、ここでは発達の内的な遺伝的要因は当然除外されている。DNA発現では、子どもが全て同じ期間に同速度で成長しないように、心身の発達にも遅速がある。

家族集団の機能には、1つには訓練・統制・命令・賞罰を与えて自信を持って社会に出て行ける

ように指導する役割がある。これは家族と外部環境を調整する役割である。2つには、愛情を持って子どもを養育し、父母やきょうだい間の感情的表出の問題を調整する役割がある。父母が共同でこれらの役割を遂行するには、夫婦・親子関係が健全でなければならない。「健全」とは社会的に容認された性関係、経済的な安定・子どもの養育義務・情操的な責任・権利・義務、家庭の永続性等の包括的な人間関係の維持が要る。健康な家族では夫婦のいずれがリーダーシップをとることができ、病理的な家族では常に一方が専制的で、家族の誰もがリーダーシップをとれないことがある。

個人経験による児童観は、発達速度に個人差があることが是認されており養育者の個人経験に大きく依存する。個人経験に依存する人格形成過程には家族神話がある。それはその家族特有の一連の価値基準・信念・タブーなどから成る。健康な家族には、ある程度の柔軟性や現実性があり、家族が全体的に自ら抱いているイメージと、第三者のそのイメージとの一致度が高い。また、健康な家族では構成員の意見は尊重され、対話が効率的に展開する。自分の気持ちをうまく伝え、互いに責任をもって関り、相手への介入も適切である。家族の触れ合いは温かく友好的で、感情表現は開放的に共感的に受容する能力がある。

考察の視点として、ここでは上記内容から次の2点を抽出する。それらには学童中期の発達課題の中核の一部となる勤勉の概念の中には能力を築き上げて、有意義な仕事を遂行するという熱意も含まれる（下線は引用者）。<sup>7)</sup>

- (1) 児童観からは、養育者が愛情を持った適切な訓練・統制・命令・賞罰等を与え、子どもが自信を持って社会に出て行くことができるように、応答（適切な対応）が成されたか。子どもの行動・能力の変化の時期（即ち発達段階）を捉えて行動を社会的に望ましい方向に導いたか。これら2点は一親の子どもへの接し方であり、ある程度、「放任しないで抑制すること」につながる。

両群の全体的な顕著な違いは家庭生活に見られた。それらを個々の項目別で見ると「はい集団」は「いいえ集団」よりも成長度が高いと言わざるをえない。

- (i) 家庭の規則遵守・習慣形成の項目（以下「はい／いいえ」の形で％は省略）

これは子どもが自信を持って社会に出て行

くためのルール遵守の心的な態勢の基礎である。「朝食は一緒」で社会的なマナーの習得(82.6/50)、「家のお手伝い」で日常生活の積極的な行動が見える(75.9/0)。「TV・ラジオで夜更ししない」では生活のリズム(就寝・作業配分の習慣形成など)にかなりの違いがある(62.1/18.8)。これら家庭の規則遵守・習慣形成の項目では、両集団の家族が果たすべき機能には差があり、「はい集団」の家族機能(習慣形成に関する)は「はい集団」よりも緩いことを示している。これらは歩行期の自己抑制の発達課題(忍耐力や努力の要素)、学童前期の性役割の認知、初期の道徳的発達(家族や地域社会の罰や報酬を伴う道徳的基準の学習：自分や家族への罰則・悪影響、社会的契約、普遍的な倫理原則に基づく判断)、学童中期の外的評価(成績・教師の意見・親の承認・仲間の承認)を自ら確認する習慣形成が充分か否かが問われる部分であり、「はい集団」の家族は「はい集団」に比較してこれらの事柄への配慮が充分でなかったといえる。

- (ii) 忍耐や知的抑制の項目

規則の遵守、自己抑制では「欲しいものは我慢させられた」(93.1/81.3)、「欲しいものは手に入れるまでは頑張らなかった」(69.0/31.3)の項目は家族機能のリーダーシップ・説得の仕方などがある。「言葉遣いの注意」(69.0/31.3)は言語の伝達機能の涵養にも属するが、それは「く宿題／勉強をしなさい」の注意は素直にきいた」(69.0/43.8)と共に知的能力につながる部分で両集団の家族機能には差異があった。

「はい集団」の自分(人格特性)を「どちらかといえば普通」と思っている人達の半数は、「物事の判断は直感に頼る方」(27.6/50.0)であり、「感情は抑制してしまう」(20.7/43.8)ことが、「はい集団」よりも多い。前者の判断はデータなどでなく直感で行い、失敗に気付いても感情表出はしないで抑えてしまう懸念(可能性)が伴う。現時点の学生生活では失敗は修正しやすいので、ある程度、感情表出はある方が望ましい。

- (iii) 学校生活の項目(希望と上昇志向)

子どもの上昇志向は発達段階にもあるように、子ども自身の内的な発達スケジュールに

従って自己能力として自然に発達し、これには読書能力が最も重要なカギとなることは既に述べた。この点で、大人のともすれば自己利益誘導を伴う上昇志向と異なる。「将来の夢に向けて努力をしようとした」(55.2/25.0)、「先生の話はよく聞いた」(82.2/43.8)はその上昇志向の部分の表われである。「物事の判断は直感に頼る方」(27.6/50.0)は、「はい集団」の方が「いいえ集団」よりも少なく、前者の3/4程は、物事を直感では判断しないで、論理やデータにより判断する習慣があることが推測される。この場合、感情表出は少ない(20.7/43.8)という冷静さが推測できる。

(iv) 社会生活の項目(交友関係の広がり・同調などの態度)

10歳前後の交友関係では、家庭環境により友達を受け入れがたい状況もあるが、「自分の家に友達がよく遊びに来た」(82.2/56.3)経験は、学校で見られない友達の個性に接する機会である。そこでは友達は家庭で振舞う生の行動により近いものを出す。それに同調・反発しながら友達仲間の集合離散が起こる。このような経験を基にして流行の洋服や靴などに注目するが、家族の信念やその他の状況により「洋服や靴はブランド品を欲しがらなかった」(79.3/68.8)という抑制が維持された。

(v) 現在の人格的特性の(どちらかといえば好ましい)「臨機応変に対応できる」(51.7/43.8)と「他人を思いやる優しい気持ちがある」(65.5/50.0)は、家族が自分に対して行った「適切な応答性」が形成した尺度による結果といえる。「自分の義務も果たし自己主張もする」(20.7/31.3)は、「自己主張を認めるのが民主的であり幸せである」という家族意識が反映されているようにも思われる。義務(この場合、協同責任)が欠落すると、不幸の原因者は、自己主張を認めない側から攻められ責任をとらされるという発展性的見込みがない構図となる。

## V. 結論

社会的愛着とは、乳児が母親との間に肯定的情緒関係(例えば離れがたい思い)を形成することである。これは日本語でいう「甘え」に相当する。

「子どもは十分な愛情を持って養育する」と言うときの愛情である。この愛情が十分に与えられないと(即ち「愛着形成」が不十分であると)、不安が先行して自立しがたいというのが、エリクソンの考え方であり、これが「自然な甘え」である。自然に甘えられないと「その分ひそかに甘ったれたり甘やかしたりする結果が生まれ、これが日本の社会をダメにしていることができます(土居健郎)」ということになる。乳児期の甘えが充分あれば、子どもは「最初は振り返り振り返り、戻るべき親との距離を確かめながら」やがて「自立」の方向に向かって進んで行く。その自立に発達段階と課題があり、それに家族が機能する部分がある。更に発達には臨界期があり、今回の場合は家族がその臨界期に無意識であっても、どの程度挑戦したかが見えてくる。

今回の調査の考察の対象は「はい」が70%以上の集団と、「いいえ」が50%以上の集団とし(以後、%を省き「はい/いいえ」の形で記載)、以下の項目に分けて結論を述べる。

### 1. 家庭の規則遵守・習慣形成について

#### (1) 「はい集団」の家族の特徴

- ①生活のリズム、社会的なマナーの習得、日常生活の積極的行動などの習慣形成に関する家族機能は「いいえ集団」より厳しい。
- ②忍耐や知的抑制を示す規則の遵守、自己抑制への関心は、「いいえ集団」と同様にかなり「欲しいものは我慢させる」ことに家族は理解しあった。
- ③言葉遣いなどの「社会的な伝達機能」育成に対する関心は、「いいえ集団」の倍以上あり、知的能力への関心を示す宿題/勉強に対する発言でも「はい集団」は「いいえ集団」より高い。
- ④学校生活における「希望と上昇志向」は「はい集団」の半数以上が高い意欲を示し、「将来に夢を持った人」は半数以上あり、「先生の話をよく聞いて」いるのは8割をこえ、「物事の判断は直感に頼る方」していたのは全体の1/4強であった。

#### (2) 「いいえ集団」の家族のその他の特徴

- ①この集団の半数は「物事の判断は直感に頼る方」であり、「感情は抑制してしまう」ことがある。このことは、物事の判断はデータなどでなく直感で行い、失敗に気付いても感情表出はしないで抑えてしまう懸念(可能性)



を窺わせる。現時点の学生生活では失敗は修正しやすいので、家族観から言っても、感情表出はする方が望ましい。

- ②学校生活における「希望と上昇志向」の意欲を示す「将来の夢に向けて努力をしようとした」人は全体の1/4で「先生の話はよく聞いた」人、「物事の判断は直感に頼る方」も半分いた。
- ③家族、養育者の応答性では、子どもの行動・能力の変化の時期（即ち発達段階）を捉えて行動を社会的に望ましい方向に導いたか否かが問題となる。このことは、家族の子どもに対する接し方である。「はい集団」との比較では「放任」「抑制」の概念に関心が薄いことも想定することができる。また、この集団は「応答性の質」では、自分が育てられたように子どもを養育する傾向があるので「臨界期」を逸する傾向があるとも考えられる。

（注1）「三歳児神話」ジョン・ボウルビイの「乳幼児の精神衛生」には、「母性的養育の喪失による病理的不安定な子どもの創出」が明記。つまり、幼い頃に母性的な養育を十分に受けられなかった子どもは、病的な発達を示し、それは全生涯にわたって影響するというもの。これは後の「三歳児神話」に発展し、欧米をはじめ先進諸国に幼少期の母性の重要性が広まる契機となった。しかし、アメリカでの調査では、保育士などの第三者による保育によって母子関係が改善されるなど、母親の育児が不可欠であるとはいえないことが判明した。「三歳児神話」の考えは今日においてなお育児に影響を与えている（小西行郎『早期教育と脳』光文社新書162、2004、p.120）。

（注2）ヒトの「臨界期」とは、盛んにシナプスの数が増える3～4歳ごろ、さらに少し範囲を広げ、IQを育て上げていく期間、すなわち0歳から10歳くらいまでをいっている（澤口俊之『痛快！頭を良くする脳科学』集英社2002、p.82）

（注3）調査に際しては、調査目的を説明し、それに賛同する人のみ調査対象とした。回答は無記名とした。

（注4）調査対象は日本赤十字秋田短期大学看護学科学生

## 引用文献

- 1) バーバラM. ニュウマン／フィップR. ニュウマン 福富護訳『生涯発達心理学』川島書店、1997、pp.27-35
- 2) Ainsworth, M. D. S. The development of infant-mother attachment. In B. M. Caldwell and H. N. Ricciuti(eds.) Review of child development research (Vol. 3). Chicago: University of Chicago Press, 1973. バーバラM. ニュウマン／フィップR. ニュウマンが援用している。同上、p.96。尚。この稿の内容は主に同著に依拠している。
- 3) 同上、p.99。この項はVaughn, B., Egeland, B., Sroufe L.A. & Water, E. Individual differences in infant-mother attachment at twelve and eighteen months: Stability and change in families under stress. Child Development, 1979, 50, 971-975。
- 4) 同上、E. H. Erikson, Childhood and society (2nd ed.). New York: Norton, 1963を引用。
- 5) 同上、T. J. Berndt, Developmental changes in conformity to peers and parents. Developmental psychology 1979, 608-616。
- 6) 伊藤榮子『家庭を持つ看護師と母子関係の形成』医療文化社、2002、p.182。
- 7) 岡本裕子、家族関係、子安増生・二宮克美（編）『発達心理学』（改訂版）、新曜社、2004、p.77。

## その他の参考文献

- 1) 神谷美恵子『こころの旅』みすず書房、1996。
- 2) 新道幸恵『母性看護学①母性看護学概論・母性保健／女性のライフサイクルと母性看護』メヂカルフレンド社、平成15（2003）年
- 3) Parsons, T., 1955, Family structure and the socialization of the child. In T. Parsons & R. F. Bales (Eds.) Family, socialization and the interaction process. New York: Free Press.
- 4) 小島秀夫「子育ての伝統を訪ねて」新曜社、1989。
- 5) W. R. Beavers, Successful marriage, New York: Norton.
- 6) 土居健郎・斉藤隆『「甘え」と日本人』朝日出版社、2004（p.40）。
- 7) 服部祥子・原田正文「乳幼児の心身発達と環境」名古屋大学出版会、1996。
- 8) 繁田進・大日向雅美『母性』こころ・かただ・社会、新曜社、1992。

表1 心理社会的発達段階と課題 (後成説的発達論)  
E.H.エリクソンの「発達課題の段階表」(Epigenetic Chart)の改変

DNA発現スケジュール	胎児期	乳児期	歩行期	学童前期	学童中期	青年前期	青年後期	成人前期	成人中期	成人後期	内 省
	受精～誕生	誕生～2歳	2～4歳	5～7歳	8～12歳	13～17歳	18～22歳	23～34歳	35～60歳	61歳～	
心理社会的発達 発達課題(クリアー-不能-危機)	親になるための 責任感の涵養 (信頼・依存)		模 倣	同一視	教 育	仲間の圧力	役割実験	仲間との相互性	人と環境との相 互作用と創造性		老化による身体変化への 対応、新しい役割への方 向付け、人生の受容、死 に対する見方の発達
統合(絶望)											
生殖性(停滞)									家庭の経営、育児、 職業の管理		
親密性(孤立)								結婚、出産、仕事、 ライフスタイル			
個人的同一性(役割拡散)								(一 脚 注 参 照 -)			
集団同一性(疎外・孤独)							身体的成熟、形式的操作、 情動の発達、仲間集団に おける成員性、異性関係	↓			
勤勉性(劣等感)					社会的協力、自己評価技 能の習得、チームプレイ の成員となる(参加)	↓	*家族と一緒に食事・行 事を計画することが困難 になる。子供の移動が 難い。親の直接的な方向付 け・影響を受ける機会 が減少する。 *親の価値判断と異なる 友関係を子供が選択す れば親子間に葛藤が生 じる。親は子の仲間の 成員性に関心を示し相 当の影響を子に及ぼす が、何らかの仲間集団 からの要求に抵抗した り、抜けたりすることは 難しい。親友が決まり、 それをもできないと孤独 を感じる。 *自分の価値がないとい う感覚、不適切な感覚一 面性に陥り、不向きな 前例に照らして不向き (不適)だ—を自覚す る(劣等感の原因)。				
積極性(罪悪感)				性の同一視、具体的操 作、初期の道徳性の発 達、集団遊び	↓	*勤勉性を身につける契 機となる。責任あるこ とができると思う。能 力発達は促進できる。 *強化するものには成 績、物的報酬特典、ほ め言葉による勇気付け 等(勤勉性の原因)が ある。 *自分に向き合えないとい う感覚、不適切な感覚一 面性に陥り、不向きな 前例に照らして不向き (不適)だ—を自覚す る(劣等感の原因)。					
自律(恥・疑惑)			運動能力の完成、空 想と遊び、言語の発 達、自己抑制	↓	性の役割、傾向(性 ジェンダーの同一性) を学ぶ。 *家族や地域の道徳的基 礎を学習し、それを基 礎として内在化し、行 動を方向付ける。 *能力して作った(学校 の)規則は守るなけれ ばと考える。これに対 する家庭の協力も大切 である。						
信頼(不信)		社会的覚悟、感覚運 動的知能と原始的因 果律 対象の永続性、 感覚運動機能の成熟									
安全性(催奇性)	正常な胎児の発達										

(表中の\*からの括弧)

1. (学童前期) 家族や地域の道徳的基準を学習し、それを基準として内在化し、行動を方向付ける。協力して作った(学校等の)規則は守らなければ、...と考える。
2. (学童中期) 勤勉性を身につける契機となる。責任あることができる。比較して劣等感を生み出す。
3. (青年前期) 家族と一緒に食事・行事を計画することが困難になる。子供の移動範囲・家庭外活動が増し、親の直接的な方向付け・影響を受ける機会が減少する。
4. (青年後期) 家族、近隣、教師、友人、国家がこの時期の青年の行動にある種の期待を抱くことを知る。仕事、結婚、選挙等で自己形成、決断を通らされる。これらに失敗し立ち直らなければ、将来の方向を見失う事がある。

(参考2) 女性の性に関する教育と責任

1. (国連世界女性会議：北京、1995)  
性に対する興味関心はDNAの生存の戦略(本能)である。  
ex. 高校段階での性教育の基本的な考え方は心理社会的発達課題  
のクリアーを優先するか否かは個人の人生の選択である。これ  
に関する周囲の人々は、このような選択が人生には伴っていること  
を気付かせる事がその義務と云える。それ以後の事は個人の選  
択。負うべき責任に課せられる。
2. WHOの提言(「母性看護学」)メチカルフレンド社、2003  
「女性の性と生殖については健康な状態に置かれるなければな  
らない」受胎-育児までを含む。

表2 調査項目で◎70%以上の集団と△50%以上の集団\*の比較と現在の人格的特性の自己評価

調 査 項 目 等 (小学校4年生時分まで)		2 つ の 集 団 の 項 目 別 対 比							
		◎ (はい)が70%以上の集団(N=29)				△ (いいえ)が50%以上の集団(N=16)			
		◎人数	%	△人数	%	◎人数	%	△人数	%
I (家庭生活)	1 起床と就寝の時間は大体決まっていました。	25	86.2	3	10.3	13	81.3	3	18.8
	2 朝は父母などによく起こされませんでした。	17	58.6	12	41.4	9	56.3	7	43.8
	3 服は手伝ってもらわないで一人で着ました。	28	96.6	1	3.4	12	75	4	25
	4 朝食は家族一緒に食べました。	24	82.6	5	17.2	8	50	8	50
	5 箸は普通に使えました。	27	93.1	2	6.9	12	75	4	25
	6 欲しい物は我慢させられたことがありました。	27	93.1	2	6.9	13	81.3	2	12.5
	7 欲しい物は手に入れるまで頑張りました。	20	69	7	24.1	5	31.3	9	56.3
	8 食事・給食では他人よりも時間がかからなかった。	13	44.8	7	24.1	5	31.3	9	56.3
	9 学校への忘れ物はしませんでした。	23	79.3	6	20.7	4	25	12	75
	10 登校前にトイレを済ませた。	26	89.7	3	10.3	9	56.3	7	43.8
	11 家のお手伝いをよくした。	22	75.9	6	20.7	0	0	15	93.8
	12 TV・ゲームなどで夜更しなかった。	18	62.1	10	34.5	3	18.8	13	81.3
	13 自分の部屋の掃除は自分でするようにした	19	65.5	6	20.7	2	12.5	11	68.8
	14 自分の下着は自分で洗うように指導された。	8	27.6	20	69	0	0	16	100
	15 自分の下着は自分で洗おうとした。	8	27.6	19	65.5	0	0	16	100
	16 食事の準備や後片付けのお手伝いをしました。	28	96.6	1	3.4	8	50	8	50
	17 言葉遣いの注意をされました。	20	69	9	31	5	31.3	11	68.8
	18 宿題・勉強をするように家人に言われました。	26	89.7	3	10.3	11	68.8	5	31.3
	19 「宿題・勉強をしなさい」は素直に聞いた。	20	69	9	31	7	43.8	8	50
II (学校生活)	20 学校では楽しく話す友達がいました。	28	96.6	1	3.4	15	93.8	1	6.3
	21 自分から先生に話しかけたことがあった。	28	96.6	0	0	16	100	0	0
	22 給食は楽しかった。	27	93.1	1	3.4	15	93.8	1	6.3
	23 日直や掃除当番は進んでしました。	27	93.1	2	6.9	14	87.5	2	12.5
	24 先生に時々褒められた。		93.1	0	0	15	93.8	0	0
	25 休み時間は友達とよく遊びました。	27	93.1	0	0	16	100	0	0
	26 学校では自分のモデルにしたい人がいました。	16	55.2	12	41.4	9	56.3	7	43.8
	27 将来の夢に向けて努力しようと思いました。	26	55.2	11	37.9	4	25	10	62.5
	28 先生の話はよく聞いたと思う。	24	82.2	5	17.2	7	43.8	9	56.3
	29 給食は好き嫌いなくよく食べましたか	20	69	8	27.6	12	75	4	25
	30 食物アレルギーはなかった	27	93.1	2	6.9	14	87.5	2	12.5
III (社会生活)	31 自分の祖父母や親戚の方たちとよく交流した。	26	89.7	3	10.3	14	87.5	2	12.5
	32 ご近所の人たちへの挨拶は普通にできました。	28	96.6	1	3.4	14	87.5	2	12.5
	33 ご近所の幼い子どもや老人によく声をかけた。	20	69	6	20.7	11	68.8	5	31.3
	34 ご近所の人たちによく声をかけられた。	28	96.6	1	3.4	15	93.8	1	6.3
	35 自分の家に友達がよく遊びに来ました。	24	82.2	5	17.2	9	56.3	7	43.8
	36 縁日(お祭りなど)に親や友達でよく出かけた	26	89.7	1	3.4	13	81.3	3	18.2
	37 友達の家や自分の家で遊ぶ仲良しの友達がいた。	27	93.1	1	3.4	14	87.5	2	12.5
	38 洋服や靴などのブランド品は欲しがらなかった。	23	79.3	5	17.2	11	68.8	5	31.3
参考1	◎が70%以上の集団の%の平均値-家庭生活:◎72.4、△23.8。学校生活:◎83.7、△13.2。社会生活:◎87.0、△9.9。(○は除外)								
	△が50%以上の集団の%の平均値-家庭生活:◎41.5、△55.3。学校生活:◎77.9、△20.5。社会生活:◎78.9、△21.1。(○は除外)								
IV (現在の人格的特性)	(a)「どちらかと言えば好ましい」人格的特性	◎の(a)の% (平均値42.7)				◎の(a)の% (平均値40.7)			
	1 自分の理想を実現するために努力する	18	62.1			9	56.3		
	2 社会一般の規制、倫理・道徳を守ろうとする	11	38			6	37.5		
	3 自分の義務も果たし自己主張もする	6	20.7			5	31.3		
	4 臨機応変に対応できる	15	51.7			7	43.8		
	5 将来のことを十分考えて行動できる	6	20.7			2	12.5		
	6 他人の反対意見を聞く余裕がある	19	65.5			12	75		
	7 議論をする時に感情的になることが少ない	5	17.2			3	18.8		
	8 他人を思いやる優しい気持ちがある	19	65.5			8	50		
	(b)「どちらかといえば普通」の人格的特性	○の(b)の% (平均値35.9)				○の(b)の% (平均値36.6)			
	9 好奇心が旺盛である		16	55.2			10	62.5	
	10 体調不良の時は自重する		12	41.4			5	31.3	
	11 料理、洗濯、掃除などは進んで行う		14	48.3			4	25	
	12 判断する時は直感に頼る場合が多い		8	27.6			8	50	
	13 辛い時でも我慢することが多い		14	48.3			6	37.5	
	14 感情は抑制してしまう		6	20.7			7	43.8	
	15 人に期待されると懸命に努力する		3	10.3			1	6.3	
	(c)「どちらかと言えば好ましくない」人格的特性	△の(c)の% (平均値21.3)				△の(c)の% (平均値23.8)			
	16 人前では遠慮して消極的になる			12	41.4			6	37.5
	17 欲しい物はどうしても手に入れたと思う			1	3.4			2	12.5
	18 苛立ったり怒ったりする場合が多い			11	37.9			7	43.8
	19 他人や親の責任を強く追求する方である			3	10.3			3	18.8
	20 無意識に他人を厳しく批判する場合がある			4	13.7			1	6.3
参考2	◎(はい)の数 (a)の集団(99人)	48.80%	(b)の集団(73)		36.00%	(c)の集団(31)		15.30%	
	△(いいえ)の数 (a)の集団(52人)	46.40%	(b)の集団(41)		36.60%	(c)の集団(19)		17.00%	

(注1) \*集団特徴をできるだけ鮮明にするために、本編では集団分類基準を◎70%以上と△50%以上に設定した。

(注2) 参考2は◎: N=203 (29×7項目)、△: N=112 (16×7項目)。